レインボー

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レインボー

【Ｎコード】
Ｎ４７５５Ａ

【作者名】
詩音

【あらすじ】
望月奏ー１８歳。奏は２年前に大ヒットした『ＳＴＡＲｓ』のボーカル、カナテだった。しかしある事故でバンドは解散し、その事がきっかけで奏は生きる希望を失い、歌う事をやめた。しかし、奏は将吾に出会い、再び歌う事を決心したのだ。過去と戦いながら必死で夢を追い掛ける６人の物語。

プロローグ

2年前、1つのグループが日本を揺るがしていた。出す曲すべてオリコン1位だった。狂いのないベース、ドラム、天才的なギター。そして、すべてを引き込ませてしまう、神の声のようなボーカル。体の奥まで響くその声は、あらゆるものに大きな影響をあたえた。

ＴＶゃ雑誌にぁ出ず、ライブも報道関係は一切入れない全てが謎のバンドを、連日マスコミは追い続けた。レイ、タクミ、イツキ、カナテ。この４人で結成されたバンド『ＳＴＡＲｓ』ぁ日本のトップまであと少しという所で突如、姿を消した。

月日は流れて今や伝説となった『ＳＴＡＲｓ』。今も皆の心の中には、色あせないあの歌声が響いている。

第1話；出会い

『ヤッベー遅刻だ！！』
そう言いながら街の中を勢いよく走っている人がいた。肩にはギターが掛っている。
神山将吾ー１８歳、高校３年。
２年前の伝説のバンド『ＳＴＡＲｓ』に憧れてギターを始めて、親友の伊藤浩貴にベースをやらせて、バンドを組もうとしてるのだ。
今から将吾は浩貴と仲間探しのため、いろんなライブハウスを回る予定だったが、遅刻をしてしまい、待ち合わせの場所に大急ぎで向かっているのだ。やっと着いた時には、３０分も遅刻していた。
『男を待つ趣味は無いんだょ（怒）』浩貴は、やはりキレてた（汗）
『ごめんなさい←←』
『……まぁいぃゃ。それより行こうぜ。』
将吾と浩貴は、ライブハウスへ歩きだした……。
『良いボーカルいなかったなぁ。』
ライブが終わり、帰りながら将吾が呟いた。
『お前の理想が高すぎなんだょ！！誰だっけぇ、理想のボーカルは？？』『……カナテ』将吾が小さい声で言った。
将吾は『ＳＴＡＲｓ』の中でもカナテが特に好きだった。解散後、将吾は色々な事をしてカナテの情報を探したが、将吾自身と同じ歳意外は、どこに住んでるのかも、生きてるのかも分からなかった。
『おぃ、将吾！！立ち止まんなょ。邪魔になるぞ。』
浩貴がちょっと離れた場所から叫んだ。いつの間にか将吾は、立ち止まっていたようだ。将吾は浩貴の声で我にかえり、
『待てよ。』
っと言い、浩貴の後を追って走りだした。その時、逆の方から歩いてきていた女の子とぶつかってしまった。女の子が持っていた紙は辺り一面に散らばってしまった。

『いったー。』
女の子はぶつかった衝撃で倒れていた。それに気付いた浩貴は、紙を拾い始めた。
『ゴメン！！急いでたもんで、ちゃんと前を見て歩いてなかった←←ホントにごめん。』
将吾も謝りながら紙を拾い始めた。
『君こそ大丈夫？？奏にぶつかって怪我してない？？？』
ぶつかった女の子の友達らしき子が将吾に話しかけてきた。それを聞いた、ぶつかった女の子は、
『ちょっと、蜜柑！！何て事言うのよ！！！！あっ……でも大丈夫ですか？？』
と言った。
『俺は大丈夫。君は？』
『私も大丈夫です。』
浩貴と将吾は、やっと紙を拾い終え、女の子に渡した。その時、ぶつかった子の友達は、何かを思いだしたように『あっ』と叫んだ。
『あの、間違ってたらすいませんが、神山君に伊藤君だょね？？』
2人はびっくりした。
『どうして知ってんだ！？』
『だって、同じ高校で同学年だもん。その中で君達を知らない人は少ないんじゃない？？』
『えっ……』
『いつもＳＴＡＲｓの事で騒ぎまくって、あげくの果てには、そこら辺の男子にバンドやらないかって聞きまくってれば知らない人はいないょ。』
将吾と浩貴は苦笑いをするしかなかった。
『あっ、こっちの自己紹介がまだだったね。私は新野蜜柑で神山君がぶつかった方が……』
蜜柑が言いかけた時、ぶつかった女の子は話を遮った。
『私の紹介はいいの。それじゃぁ、私達急いでたいるんで。』

『ちょっと！！話しの途中！！』『いいから！！それじゃぁ』そう言うと、蜜柑を引っ張って人ごみの中へと消えていった。その時、
『これって、さっきの子のじゃない？？』『これって、さっきの子のじゃない？？』
浩貴は落ちていたモノを拾い上げた。それは生徒手帳だった。
『望月……奏。３－Ｃだって。へぇー可愛いじゃん。明日届けるか、なぁ、将吾？』将吾は何かを考えてた。すると、やっと答えが出たらしく、興奮しながら浩貴に言った。
『もしかしたら、あの子がＳＴＡＲｓのカナテかもしれない！！いや、絶対にそうだ。』
『お前さぁ、こんな偶然あるわけないだろ。』
『声がそっくりなんだょ！！』
『それだけでカナテって言えるか？？』
『俺の勘がそう言ってるから間違いない！！』
『……分かったょ。将吾がそこまで言うなら、生徒手帳を返しに行くついでに聞こう。』
『よっしゃ！！』
将吾は明日が待ち遠しくなった。

第2話：飛べない天使

～次の日～

将吾と浩貴は、３－Ｃに向かった。

しかし、そこには奏と蜜柑の姿はなくクラスの人に聞いたら中庭に行ったと言われた。中庭に行くと、大きな木の下で鳥と戯れている奏がいた。まるで天使のように美しい奏に、２人は見いってしまった。その時、２人を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、蜜柑が立っていた。奏も２人に気付き、こちらを向いた。鳥は飛びたっていった。

『２人ともどうしたの？私達に用事？？』蜜柑が聞いてきた。

『昨日、これも落ちてて。』

将吾は、奏に生徒手帳を渡した。

『ありがとう☆☆☆探してたんだ。』

奏はニコッと笑った。その笑顔に将吾は、ドキッとした。奏は、将吾の顔が赤くなっていくのを不思議そうに見ていた。将吾は見られてるのに気付き、顔を背けた。

奏が聞いた時、ようやく将吾は本来の目的を思い出した。

『１つ望月さんに聞きたい事があるんだ。』

『名前見たんだ。じゃぁ、奏って呼んで☆☆んで、何？』

『えっとぉ、奏はＳＴＡＲｓのカナテじゃないのかなぁ→って思ってさ。それだったら、俺達とバンドを組んで欲しいと思って。』

すると、奏の顔つきが厳しくなり、蜜柑は涙目になってきた。

『……どうして、そんな事を思ったの？』

『声が似てるなぁって思って。俺、ＳＴＡＲｓのファンで特にカナテが好きでＣＤとかいつも聞いてて、それで……』『……私は、ＳＴＡＲｓのカナテじゃない。私の前で、その話しをしないで。ＳＴＡＲｓなんて大嫌いなの。それじゃ。』

奏は冷たい目をして、そぅ言い放ち校舎へ歩いていった。

『感じワルッ！！』

今までずっと見ていた浩貴が言った。
『感じ悪いのはあんたたちだょ！！』
蜜柑が涙いっぱいの目で2人を睨んだ。
『2度と奏の前に現れないで。』
『どぅゆうことだょ。』
浩貴の問いかけに蜜柑は答えず、走って奏を追い掛けた。
『俺達はただ、カナテか聞いただけなのにな。』
将吾が言った。
『まぁ急に、
「カナテですか？」
って聞くのは失礼だったかもな。でもあそこまで嫌がらなくてもなぁ……あっ！もしかして本物のカナテかもしんないな！！なぁ将吾？？』
『おぅ！！粘って、俺達のバンドに入ってもらおう！！！！』
～数日後～
『奏！！バンド組もうょ☆☆☆』朝から将吾は奏を見つけ、いつものように誘っていたが、今日も奏にシカトをされて終わった。
将吾と浩貴は、あの日から毎日奏を誘っていた。いくら嫌われようが、シカトされようが2人は諦めなかった。
　奏と会ってから、将吾は奏にどんどん惹き付けられていた。最初はＳＴＡＲｓのカナテと思ってバンドを組みたいと思っていた。でも今は望月奏としての奏とバンドを組みたいと思っている。　しかし、将吾には奏と会った時から気になっている事があった。それは、奏が1度も心の底から笑った顔を見た事がないのだ。愛想笑いばかりで心を見せないようにしていると感じていた。それに、奏の目はいつも冷たかった。いつも遠くを見つめていた。その目を見ると将吾はとても胸が痛くなった。何故そうなったのかを知らないといけないと思った。　　あれから数週間が過ぎた日、将吾と浩貴が家へと帰っていると、
『あれ、奏じゃない？』

と浩貴が前を指さして言った。将吾が指さした方を見ると、少し離れた所にホントに奏がいた。奏は花束を持って立っていた。２人が声をかけようとした時、奏が泣いているのに気付いた。２人はただ見ているしか出来なかった。ほんの少しして、奏が２人に気付いた。奏は涙を拭き、平然をよそおった。

『どうして、ここに？』

『いゃ、帰り道だから……それより、どうして泣いてたんだ？』

『……ゴミが目に入っただけょ。』

そぅ言うと奏の目が一層冷たくなった。

『なぁ、どうして奏は、そんなに悲しい目をしてるんだ？』

『君達には関係ないでしょ！！』『関係あるょ！奏は俺達の仲間になるんだから。』

『だから、ならないって言ってんでしょ！！』

『教えてくれ。奏はＳＴＡＲｓのカナテなのか？』

奏は一瞬言葉につまったが、意を決したように、

『分かったょ。言えばいぃんでしょ？そぅょ、私はＳＴＡＲｓのカナテょ。これでいぃの？？』

と言った。奏の目から涙がこぼれた。奏はそこから逃げ出すように走りだした。

　将吾と浩貴が奏を追い掛けようとした時、後ろから２人を呼び止める声がした。蜜柑だった。

『奏を追ってどうするの？中途半端な気持ちで奏を追わないで！！奏をこれ以上傷つけないで！！！』

『俺達は奏がいぃんだ。奏を助けたいんだ。だから、蜜柑教えてくれ！！奏が何であぁなったのか。』

将吾は蜜柑に言った。蜜柑は、その言葉で確信した。この２人は、奏を闇の中から救いだしてくれると……そしてまた、奏に希望を与えてくれると……

『……分かった、教える。奏の過去を……』

第3話：絶望の記憶

蜜柑達は近くの公園のベンチに座っていた。蜜柑は少しずつ話し始めた。

『……奏はね、昔から歌が天才的に上手かったんだ。そして中3の時に奏の前に、ある人が現れたの。歳は私達と同じ位に見えた。幼い子供みたいな笑顔で目を輝かせて……その人は大山樹。』

『樹ってあの……』

将吾が話しを遮った。

『そうょ。ＳＴＡＲｓの天才ギターリストのイツキょ。ここからＳＴＡＲｓは始まった……。』

～3年前～

『ねぇ君、望月奏ちゃんだょね??』

『そうですけど、あなたは誰さん??』

『俺は大山樹、１７歳。君の噂を聞いて来たんだ。』

『噂?』

『中学生なのに、誰もが惹き付けられる天使の声を持つ子がいるって噂☆☆☆』

『そんな!違います!!』

『いぃゃ、君が気付いてないだけだょ。俺には分かる。君の歌声が日本を揺るがすって……俺とバンドを組もう!』

奏はビックリした。どうして、この人はそんなに自信があるんだろうと……でも、この人の話しを聞いていると本当に出来そうな気がしてきた。奏は樹に惹かれバンドへと入った……。

『……それからの樹の行動は速かった。ドラムの巧、本来はすごいピアノ奏者なのに何故かベースの玲を集めた。バンド名はＳＴＡＲｓ。日本の星になるという意味で樹がつけたの。最初は小さいライブハウスでお客さんも少なかった。だけど、すぐＳＴＡＲｓは有名になった。そして1年というすごい速さでデビューした。そし

て、ＳＴＡＲｓはどんどん大きくなった。日本でＳＴＡＲｓの事を知らない人がいない程に……
奏はその頃、樹と付き合ってたんだ。凄く仲良くて、幸せそうだった。奏はますます生き生きとして歌を歌ってた。だけど……あの事故がきっかけで、奏の心は壊れてしまったの……。』
『あの事故って？』
浩貴が聞いた。蜜柑は泣いていた。
『樹が……死んだの……』

～2年前～

『うわぁ↓また1位だょ！！』
蜜柑はビックリした。この前出したシングルが初登場1位だったからだ。
『当たり前！奏が歌ってんだぜ！？』
樹は自分の事のように自慢した。
『俺達は自慢じゃないのか？？』
巧が文句を言った。
『お前らも俺の自慢だぁ！！』
奏は笑っていた。
『そういえば、みんなに言う事があった。』
樹が思い出したように言った。
『何？』
『日曜にマスコミ関係集めてライブやろうと思う。そろそろ全国に俺達の姿を見せてやろぅ！！』
『日曜って4日後じゃん！！急だな。』
巧が言った。
『急な事はいつもの事だし、俺はいいょ。奏が良いって言えば。』
玲が言った。奏はちょっと、考えて、
『ぅん！！いぃょ、やろぅ☆初の顔見せだし気合い入る↓。あっ！でも私の顔を見て皆、幻滅しないかなぁ』『大丈夫！奏は可愛いす

ぎだから☆』
そう言いながら巧は、奏に抱きついた。それを見た樹は
『だから巧！！奏は俺のモノだ！！！』
っと言い、巧から奏を奪い返した。そして、いつもの奪い合いが始まった。
『あ～ぁ、また始まった。毎日飽きないよね。ねぇ、玲？』
玲は、静かにドラムのとこへ歩いて行き、思い切り叩いた。ケンカしていた2人は動きを止めて、玲を見た。玲は不機嫌そうに、
『ウルサイ』
っと言った。2人は、
『ごめんなさぃ←←』
っと同時に謝った。一瞬間を置いて、皆は大声で笑った。

『ったく巧はムカツクなぁ。奏は俺のもんなのに……』
練習を終えた樹は奏を送って行っていた。
『まぁまぁ、巧も悪気があるわけじゃないし（汗）』
『あれが悪気がないように見えるか??』
『（苦笑）ってかね、日曜はお客さん来てくれるかなぁ。心配……それに私、ちゃんと歌えるかな…』
奏は立ち止まって樹に聞いた。樹は心配そうな顔の奏を、愛しく思った。樹は奏を抱き締めた。
『奏の歌は皆を幸せにする歌だ。だから大丈夫！！それに奏は俺の夢だ。そして、奏の歌は皆に夢を見せてくれるんだ。一緒にでかくなろう！！』
奏は嬉しかった。樹はいつも、奏の灯りだった。道に迷った時は、その灯りが自分をともしてくれた。だから奏は自分の歌を歌えると思っていた。…樹のために…

それから3日間ＳＴＡＲｓは練習し続けた。
『いょいょ明日だな。』

最後の練習を終えた時巧が言った。
練習場から出たとき樹が、
『奏、ごめん！！今日は今から用事があるから送っていけない。誰かに送ってもらってくれないか？』
っと奏に言った。
『大丈夫☆子供じゃないから1人で帰れる。』
『高校生は十分子供と思うけど…ホントにゴメン。じゃぁな。』
『バイバイ☆☆』
奏は樹の後ろ姿を見送った。その時、奏の心の中に不安がよぎった。何で樹との別れがこんなに寂しいのか分からなかった。今まで1度もこんな事なかったのに……
『樹…』奏は、樹が消えていった人ごみの方を見て呟いた。

～ライブ当日～

『うわぁ！！始まる1時間前なのに、いっぱい人がいる！！！』
奏はライブハウスの外を見て声をあげた。外には、遥か彼方まで続く列が見えた。マスコミ関係もたくさん来ていた。
『それにしても、樹遅いな。』
玲が言った。今日は開演2時間前には集まろうと言ったのは樹だった。しかし、開演まで1時間を切ったのに樹は来ていなかった。
『樹が遅れるのっておかしくないか？だってアイツは、いつも1番最初に来てんじゃん。何かあったんじゃ……』
玲が言った。奏は震えが止まらなかった。それに気付いた巧は、そっと奏を抱き締めた。
『奏が樹を信じないでどうするんだ！？アイツは大丈夫だ。だから今は樹を信じよう。』
奏は頷いた。巧のおかげで、震えは止まったが、不安は消えなかった。その時、控え室のドアが勢いよく開いた。そこには、息をきらせながら立っている蜜柑がいた。蜜柑は樹と連絡がとれないため、樹の家に行ってくると言って、３０分前にここを出ていったのだ。

『速かったな。で、樹は??』
『樹は……事故に遭ったらしくて救急車で運ばれたって……』
巧はそれを聞いて蜜柑に詰め寄った。
『樹は大丈夫なんだろ!?すぐにこっちに来るんだろ!?なぁ、蜜柑!!』
『そこまでは分からない…ただ、現場を見た人は酷い事故だったって……』
奏は控え室を飛び出し、病院へと走った。
信じたくなかった。樹は生きている。そう自分に言い聞かせながら…
『マネージャー!ライブを中止させてくれ。俺達も病院へ行く』
巧はそういうと奏を追うように出ていった。それに続いて蜜柑と玲も出ていった。

奏、巧、玲、蜜柑は霊安室にいた。目の前には樹が横たわっていた。信号無視のトラックから目の前にいた、子供をかばおうとしたらしい。子供はかすり傷で済んだ。でも樹は……
奏は樹を揺すった。涙は出なかった。
『ねぇ、起きてよ。ライブ始まっちゃうょ。何、遅れてんのょ。ねぇってば、起きてよ!!』
皆、奏の言葉で泣いた。
『もぅ止めろ。樹は起きないんだょ……2度と……』
巧はそぅ言い、奏を樹から引き離した。奏の目からも大粒の涙が溢れ出した。
奏は、巧の制止を振りほどいて樹に言った。
『樹、前に言ったじゃん!
「奏は俺の夢だ。一緒にでかくなろう」
って!!あれは嘘だったの!?答えてよ!私にとっても樹は夢だったのに…希望だったのに!!私は今からどうすればいぃのょ!!!
誰のために歌えばいいのょ!いつものように笑いかけてょ!!側にいてょ!!樹の……嘘つき!!!!!』

『奏！！アイツは死んだんだ！！！』
玲はそう言って奏を抱き締めた。奏は玲の腕をも振りほどき、樹に叫び続けた。
『樹！嫌だょ！！いなくならないでょ！！！！！』
奏は樹が死んだなんて信じたくなかった。夢なら覚めて欲しかった。そして、樹の隣で笑っていたい……いつからだろう。こんなに大切に思えていたのは……足元が見えない。闇は嫌だ。道しるべになっていた灯りがもうない……奏の心が壊れて、奏はその場に倒れた。
ー奏の時間が止まったー

第４話：生きる者に出来る事

『……それから奏はあんな風になってしまった。歌も歌わなくなった』
将吾と浩貴は何も言えなかった。自分達は奏の事を何も知らないで、平気でバンドを組もうと言った。２人は自分を恨んだ。蜜柑はそれに気付き、
『将吾君達のせいじゃないょ。逆に私は嬉しかった。だって奏、ちょっとだけ元気になった気がするもん！！……だから……お願い！！！奏を助けて、闇の中から救い出して。君達にしか頼めないの。奏にもう一度、歌う幸せを…歩く道しるべを作ってあげて！』
っと、泣きながら２人に頼んだ。
『奏はどこにいるんだ？』
将吾が言った。
『…樹と最後に行った海と思う。』
『浩貴、蜜柑を頼む。蜜柑、奏を絶対に救い出す。約束する。』
そぅ言うと将吾は走り出した。

『樹…私はどうすればいいの？』
奏は海に向かって呟いた。本当は将吾の真っ直ぐな言葉は嬉しかった。だけど、歌ったら樹を裏切る事になると思った……
『……大丈夫だょ、樹。私は樹を裏切らないから……』
奏は、そう言いながら泣いていた。っと遠くから奏を呼ぶ声が聞こえた。将吾だった。
『どうして、この場所が分かったの？』
『蜜柑から全部聞いたんだ。さっきの場所は、樹が死んだ場所だったんだな？』
奏は将吾を睨んだ。

『蜜柑から聞いたんなら、もぅいいでしょ！？ほっといてょ！歌わないってあの時決めたの！！！』
『奏は、どうして過去ばかり気にして前に進まないんだ？』
『あなたに私の気持ちなんて分からないくせに！！！』
『あぁ、分からないさ。けどな、樹の気持ちはどうなる？樹は今の奏を見たら、きっとがっかりするだろうな。だって奏は自分から逃げてる。逃げてばかりで自分からは何もしようとしない。そんなのズルイょ！！』
『でも……樹はもぅいないもん……どこにもいないもん！！！』
『…いるじゃんか……』
将吾は優しく言った。奏は下を向いて泣いていたが、将吾の言葉で顔を上げた。
『奏の心の中で生きてるよ。だから奏は、いつまでも悲しいんだろ？』
奏は声をあげて泣き出した。
『奏、もう1度俺達と歌おう。俺が奏の苦しみも悲しみも全部受け止める。奏を1人にしない。』
将吾が言った。
『少し考えさせて……』
今の奏にとって精一杯の答えを言った。
『いつまでも待つょ。』
そぅ言うと、遠くで見守っていた蜜柑と浩貴に合図した。2人は喜んでいた。

将吾と浩貴が帰ったあと、奏は涙もふかず、海を見つめて座っていた。その顔は穏やかだった。蜜柑は後ろからそっと見守っていた。

将吾と浩貴がが帰ったあと、奏は涙もふかず、海を見つめて座っていた。その顔は穏やかだった。
あれから1週間が過ぎた。将吾と浩貴は、放課後、蜜柑のとこへ

と行った。
『奏は？』
将吾は聞いた。奏はあの日から学校に来ていないし、連絡もとれなかったのだ。蜜柑は首を振った。
『ダメ。部屋に閉じこもって、何か考えてるっぽい。親も心配してるし…』
『蜜柑…奏の家まで案内してくれ。』
突然、将吾が言った。
『俺、奏に言わないといけない事があるんだ。』
『……分かった。着いてきて。』

将吾達3人は凄く豪華な家に来ていた。奏の家はお金持ちらしい。
『話はいつも蜜柑ちゃんに聞いてるわょ。奏がお世話になってます。』
奏の母親が言った。奏とそっくりで、綺麗で若く見えた。2人はみとれていたが、蜜柑に足を蹴られ我にかえった。
『あっ……はぃ。あの…奏は？』
『奏は部屋から出てこないの。心配だけど……まっ、大丈夫でしょ☆☆☆』
奏の母親はニッコリ笑って言った。
『あの、奏の部屋はどこですか？』
『そこょ。』
奏の母親は一室を指さした。
『将吾君、浩貴君、蜜柑ちゃん。奏をこれからも支えてあげてね。』
3人は強く頷いた。
　将吾は奏の部屋の前に立った。そして、ゆっくりと話しかけ始めた。
『奏、聞こえるか？』
『……ぅん。』

小さい声だが奏から返事が返ってきた。
『俺、奏に言わなきゃいけない事があったんだ。奏に最初に会った時、声がＳＴＡＲｓのカナテに似てて、凄く興奮して
「カナテだ！」
って思って、奏の事を何も知らないで、平気でバンドに誘った。けどさ、奏に断り続けられて、それで奏と少し話すようになって、ちょっとずつ気持ちが変わってきたんだ。そして、奏の過去の事を聞いて、その気持ちがハッキリした。』
『何？』
『俺は今、ＳＴＡＲｓのカナテじゃなくて、奏自身…望月奏という子とバンドがしいんだ。奏の歌が聞きたい。ＳＴＡＲｓのカナテじゃない、本当の奏の歌を……。』
奏は思い出した。樹の笑顔を……樹は、いつも奏が歌ってる時、笑っている時に、樹も笑顔になった。今、樹が自分を見たら、きっと悲しむ……奏の心にまた、歌いたいという気持ちが宿り始めた。
『じゃぁ、明日学校で待ってる。』
将吾がそう言い、蜜柑と浩貴に合図して、帰ろうとした時、奏の部屋のドアが開いた。そこには、冷たい目の奏はいなかった。
『将吾…浩貴……私から、お願いがあるの。』
『何だ？』
『私をバンドに入れて下さい！！』
奏が頭を下げた。３人は、それぞれ顔を見合わせ、将吾が
『喜んで☆☆』
っと言った。奏は顔をあげた。そこには、将吾、浩貴が初めて見る奏の笑顔があった…。

第４．５話：将吾の悩み（前書き）

ちょっとしたハミだしモノです（笑）将吾が可愛いかな？？（＄＊、ｖ、ｂｂ））＋”．＊ある昼下がりの物語。

第４．５話：将吾の悩み

奏はあの日以来、明るくなり、よく笑うようになった。将吾は嬉しかったが１つ問題が……それは……元々可愛かった奏が、明るくなると話しかけやすくなり男子からも注目を集め、モテモテ状態になってしまったのだ。そのせいで、奏と話すのも男子からの痛い視線を集める事になった←←←しかし、実際、将吾は奏の事を好きか分からなかった。っというか、将吾は人を好きという気持ちになった事がなく、どこからが恋愛感情なのかが、まったく分からないのだ。でも、奏が違う男子と話してるのを見ると悲しくなるし、自分に笑いかけてくれると嬉しくなる。それが、好きって事……？？

『お前って天然記念物だな。』

将吾が真剣に相談したのに、浩貴はそぅ言い、鼻で笑った。

『天然記念物とは失礼な！！！いぃから教えろょ！』

その時、教室が騒がしくなった。女子も騒いでたが、男子の騒ぎようは凄かった。その原因はすぐ分かった。

『将吾ぉ↓、英語の教科書貸して☆☆』

呑気に教室に奏が入ってきた。そぅ奏が来たからだ。それも男子を尋ねて……本人にはモテているという自覚は無かった。

『次の休み時間には返せよ。』

『分かった☆☆ありがとう』

そぅ言うと奏は出ていった。浩貴は将吾の横顔をジッと見ていた。ただ教科書を貸しただけで、こんな、天使が舞ってそうな顔になっているのに好きかどうかを聞いてくる自分の親友を、つくづくバカと思った。

見られてる事に気付いた将吾は一生懸命、普通の顔を作った。その顔を見て、浩貴は爆笑した。

『笑うな！！んでさっきの相談の答えは？？』

『教えなぁい（笑）そんなのは自分で考えろ。』

浩貴は、意地悪したくなり言うのを辞めた。ってか、こうゆうのは教えるモノじゃないと思った。将吾はしつこく聞いてきたがシカトした。

ある昼下がりの平凡な日。でも、ちょっと青春してる昼下がり笑)

第5話：再び開けられたドア

奏が仲間になって、数週間が過ぎた。奏が仲間に入れたいと言い、ドラムの勇日、キーボードの和也も新たにメンバーに加わっていた。どちらも奏が見付けた仲間だった。
そして、今日は初めての練習☆☆☆しかし問題が……
『どこで練習すんの？』
勇日が将吾と浩貴に聞いた。そぅ、それが問題なのだ。実をいうと将吾と浩貴には、練習場所の心あたりがないのだ。
奏は、２人の顔を見て
『やっぱりかぁ…』
っと思った。ある程度予測は出来てたが…
『私について来て。』
奏はそぅ言うと蜜柑と歩いて行った。あとに残った４人は、言われるがまま歩いて行った。
しばらく歩くとライブハウスの前で奏は止まった。そして、入っていった。２階に上がりドアを開けると、何もない部屋があった。
『ここは？』
和也が聞いた。
『ここは、私の兄貴がやってるライブハウスでＳＴＡＲｓがまだ、駆け出しの時に練習場所として、２階を借りてたの。防音もバッチリ☆☆兄貴がわざわざ私達のタメに作ってくれたの……でも、解散しちゃったから、今は用無しの部屋なの♪♪だから、これからはここを練習場所として使おう→→』
っと言い奏は無理に笑顔を作った。将吾は胸がチクリと痛んだ。奏にこんな顔をさせてしまったのは自分がしっかりしていないせいだ……
奏は、将吾の気持ちが分かったのか
『大丈夫だょ♪』

っと言った。
そして練習の準備を始めた。奏の気遣いで、将吾は幾分楽になった。
ここに近付いてくる人の事を知らずに……

第5．5話パート1：向井勇日～1～（前書き）

勇日の仲間に入る事になった出来事です。勇日はかっこよくて身長高いイメージです（＊≧∇）乂（∇≦＊）

第5．5話パート1：向井勇日〜1〜

『さて、今日はどこに行く？』
奏は将吾に聞いた。奏が仲間になったのはいぃが、まだメンバーが足りていないため今は、メンバー探しをしているのだ。
『今日はＤＡＲＫに行く』
将吾が言った。浩貴が絶句した。それもそのはず。ＤＡＲＫは、ここら辺一体を仕切っている『ＤＡＲＫ』の溜り場で、薬はやるは暴力はあるはで、ありえない場所なのだ。
『行くっていったら行くんだ！！』
こう言い出した、将吾は誰の声も聞かない。
『そぅだょ浩貴。もしかしたら、いい人いるかもしんないじゃん。』
奏も将吾に賛成していた。
『分かったょ……』
浩貴がしぶしぶ頷いた。そしてライブハウスに行った。
ライブハウスに入った、将吾と浩貴はあまりの光景に驚いていた。悪いって言ってもここまでとは……
『帰ろう……殺されるゾ。』
浩貴が言った。将吾も頷いた。しかし奏だけは、目を瞑って演奏を聞いていた。
『なぁ奏、帰ろう。』
『ウルサイ』
その1言を言うとまた演奏を真剣に聞き始めた。2人は、この演奏のどこがいいのか分からなかった。
その時、演奏していたバンドのドラマーが凄い音を出した。曲は止まり、シーンとなった。
『やってらんね〜』
そぅドラマーは言うと、近くのドアから出ていった。
『追うょ。』

奏はそぅ言うと、さっきの人を追っていった。２人もあわてて奏の所へと走っていった。
　奏はさっきの人に追いつき、
『待って！！』
っと叫んだ。
『何だょ』
いかにも不機嫌そうな顔で言った。将吾と浩貴は何も言えずに見ていた。
『勇日だょね？』
奏が言った。
『その声は……カナテ！！』
勇日と呼ばれた男はびっくりしていた。
『何でこんな所でドラムなんてしてるの？』
『……どうでもいいだろ。』
勇日は冷たく言い放った。
『私とバンドしよう。』
その言葉に勇日だけじゃなく、将吾、浩貴もびっくりした。その様子をよそに奏は続けた。
『あれから、必死に頑張ったんだね。勇日のドラムは凄いょ。リズムが狂わない。』
『辞めろよ。そんなヤバそうなヤツ。』
浩貴は思わず口に出してしまった。
『勇日は悪い人じゃないょ。』
『そんじゃ、俺が悪い人かどうか確かめてみる？』
勇日は奏に詰め寄った。奏は動じなかった。そして悲しそうな目をした。
『昔から変わってないね、その目は……あの頃と同じ、強いんだけど悲しそうな目……まるで捨て猫みたい。』
奏は勇日を心配そうにみていた。勇日は目をそらした。そして逃げるようにそこからいなくなった。

『説明してくれないか？奏？？』今まで静かに見ていた将吾が奏に言った。

第5，5話パート1：向井勇日～2～（前書き）

ちょい雑になった（ρ_H、。）

第5，5話パート1：向井勇日～2～

『勇日とは、私がまだＳＴＡＲｓを始めたばっかの時に出会った。その時は、ＤＡＲＫの頭をやってたの。勇日と会った日、勇日は２０人位にボコボコにされて、道に倒れてた。んで、私が見付けて看病したの。』

『俺に関わんじゃねぇよ。俺が恐くないのかょ』
『ボコボコにされて、今にも死にそうな目してるヤツなんて恐くない。』
奏は勇日に微笑んだ。
『バカじゃねぇの。』
『バカで結構！！それより、アンタさぁ、こんなバカらしい事、辞めたら？？』
『うるせ！！』
勇日は奏を睨みつけた。それでも奏は一向に怖がろうとしなかった。
『私はＳＴＡＲｓっていうバンドのボーカル、奏♪♪今の君の目は悲しくなる。君の心が泣いてるんだょ。』
『……俺は今の生き方に満足してる。』
『してないから、そんな目になるんだょ。君もバンドをやってみたら？？音楽にのせて、自分の気持ちを伝えるの。』
『伝えれるワケねぇょ。たかが音楽だぜ！？』
『音楽をバカにしないで！！……分かった！！！！君達がたむろってるＤＡＲＫで私達の音楽を聞かせてあげる。もし、それを聞いて、自分自信がおかしいと思ったら、こんな事を辞めて、ちゃんとした生き方をする。いぃ？』
『……分かったょ。』

『んで、ＤＡＲＫで演奏したんだけど、最初はブーイングばっかだった。でも、音楽が進むにつれて、無くなってきて最後は大盛り上がりで終わった。勇日にも伝わったみたいで、ＤＡＲＫを辞めてドラムをしだしたって、噂で聞いてた。ＳＴＡＲｓを辞めてからは勇日と会ってなかったから、ちゃんとした事は知らなかったけど……』

『昔と状況はあまり変わってなかったって感じだな』

将吾が言った。奏は、勇日がいなくなった方へと視線を送ると、

『私は、今度こそ勇日を救う！！途中で投げ出さない！！』

っと言い走りだした。

奏は勇日の目を見ると過去の自分を見ているような気分になった。

～誰も信じたくない、関わらないで欲しい～だから勇日を救いたいのだ。将吾が自分を救ってくれたみたいに……

奏は一生懸命、勇日を探した。その時、

『君、可愛いね♪♪名前は？』

たむろっていた、ヤンキーが奏の行く手を遮って話しかけてきた。

『私、急いでるの。どいて！』

『いいじゃん、遊ぼうよ。』

ヤンキーは奏の腕を思いきり引っ張った。

『放して！！』

その時、ヤンキーに向かって蹴る足が見えた。奏はおそるおそる後ろを見た。そこには勇日がいた。

『コイツに用？』

ヤンキーに向かって勇日が冷たく言い放った。ヤンキーは勇日だと分かると、

『いっ、いえ！！』

っと慌てて言った。顔は青くなっていた。

『コイツ、俺のだから。』

と言って奏を連れて、そこから去った。しばらく歩いていると、勇

日が急に立ち止まり、奏の方を見た。
『バカじゃねぇの！？女、１人でこんな夜道を歩いたら危ないって分かるだろ！？ってか分かれよ！！』
勇日があまりにも必死に言うものだから、奏は思わず笑ってしまった。
『何だょ。』
『もしかして心配してくれてる？』
勇日は顔が赤くなった。
『あっ！照れてる？』
『照れてねぇょ！！』
奏はさっきより笑ってしまった。奏の笑いが止まると、奏は真剣な顔になり、勇日を見た。
『ねぇ、どうしてあんなバンドにいるの？』
『……最初はただドラムをやりたかったんだょ。そしたら、俺の先輩に無理矢理バンドに入れさせられて、先輩だから逆らえずに……』
『やめれば？』
『やめたらドラムを叩けなくなる。俺みたいなヤツを入れてくれるとこなんてねぇょ。』
『奏！！』
遠くの方で奏を呼ぶ声がした。
『将吾だ！！』
『行けよ。俺も帰るし。』
『あっ！待って！！勇日が辞めたいんなら私が協力する♪♪そして、一緒にやろう☆☆☆』
『……お前じゃムリだ。』
そう言うと勇日は行ってしまった。丁度その時、将吾と浩貴が来た。
『ねぇ、将吾……私、やっぱり勇日のドラムがいい。』
奏が将吾に言った。将吾は浩貴を見た。
『俺はリーダーのキミに任せるょ。』
っと浩貴は言った。

『……分かった！！奏が言うんだから腕はホントだろ。仲間に入れるゾ。』
『ありがとう、将吾☆☆』

〜次の日〜

勇日は考えていた。昨日の事を……
するとそこに、勇日のバンドのメンバーが来た。
『昨日は、よくも途中で抜けやがったな。』
そう言うと、勇日を殴った。
『俺はただ……』
殴られ続けている内に意識が薄れていった。闇が大きくなっていったが一筋の光が見えた。
『奏……』
そぅ、奏の笑顔が……
その時、どこからか水が降って来た。そこにはバケツをもった奏がいた。
『何すんだょ！！！』
『それはこっちのセリフ！！先輩だから抵抗出来ないって分かって、勇日を殴って……酷いと思わないの！？』
『うるせぇ！！』
『勇日！！勇日はホントは弱いんだょ。強がらないで……逃げないで……私は勇日を守る。今度こそ救う！もぅ1人にはさせない！！』
『奏……』
『お前ら死ね。』
勇日の先輩が勇日と奏に殴りかかった。だが逆に殴られた。将吾と浩貴が2人をかばっていた。
『俺達は、日本の頂点を目指すバンドだ。練習だってキツイぞ。それでも来るか？』
将吾が言った。

『……あぁ。』
勇日は笑っていた。
『んじゃ、逃げますか。』
浩貴がそう言い、皆は逃げた笑）

その後、勇日は改めてバンドのとこへと話をつけに行き、正式に辞めた（ちょっと強引に）そしてバンドは４人となった。

第5．5話パート2：中島和也～1～（前書き）

遅くなってごめんなさい←←学生なんで忙しくて（；´д`）次からぁもっと早く出来るょうに頑張ります（＾∀≦＊）

第5．5話パート2：中島和也～1～

勇日が入って、やっとバンドらしくなり、練習が出来ると思いきゃ、奏の提案でキーボードも入れる事になった。しかし中々みつからなかった。

『なぁ、もぅ諦めた方が良くない？』

昼休み、教室でご飯を食べながら浩貴は将吾に言った。

『だょな……奏に諦めて貰うように説得しよう。』

その時、教室が騒がしくなった。これに慣れた2人は誰が来たか予想がついた。

『2人ともいた！！探したょ。ちょっと話したい事があるんだけど……』

『分かったから、屋上へ行こう。』

将吾は周りの視線が痛かったので、屋上へと逃げた。

『んで何？』

『今日の朝ね、凄いピアノを聞いたの！！』

『それがどうした？』

『頭悪いなぁ。その人をバンドに誘って、キーボードをしてもらおう！！』

『はぁ！？そんなの出来るワケないだろ？ピアノとキーボードは全然違うんだぞ！？』

『まぁ私の話しを聞いて。』

～今日の朝～

奏は朝早くから来て、先生に頼まれた書類整理をしていた。

『もぅ！どうして1人なのょ！！！ぁんのハゲ！か弱い女子に押し付けるなんて最低（怒）』

奏はそぅ言いながら作業を止めて、寝転がった。その時、ピアノの音が聞こえてきた。奏は惹き付けられるように音楽室へと向かった。邪魔しないようにソッと入った。近くで聞くと凄かった。奏の心を癒し、優しく包んでくれた。奏の目から涙が溢れた。

その時、奏の存在に気付いたピアノを弾いていた人は、演奏を止めて奏を見た。

『どうして泣いてるの？』

その人の第一声は邪魔された事への怒りではなく、奏を心配する言葉だった。

『貴方の演奏が凄くて、昔の事を思い出しちゃって……』

『ごめん……』

『何で謝るの？私の方こそ演奏を邪魔してごめんなさい。』

『いぃょ。』

『っで、貴方の名前は何？』

『僕は３－Ｅの中島和也。望月奏さんだょね？』

『何で知ってるの？』

『有名だし、一応２年の時に同じクラスだったし……』

『知らない……（汗）』

『仕方ないょ……僕って存在薄いから……』

『ごめん（汗）落ち込まないで～。それより和也のピアノ凄かったょ♪♪感動した！！』

『ありがとう。』

その時、奏を呼ぶ声が聞こえた。

『こらぁ～！！望月どこだ！！仕事をほったらかしにして！！』

『ヤバ！ねぇ、また来ていい？？』

『えっ……』

『じゃあね☆☆』

そぅ言うと和也の返事も聞かずにルンルン気分で奏は帰っていった。

その後、先生に怒られたが……

『……というワケなの。』
『それで、ソイツをキーボードにしたいって事？』
『うん→→』
奏は頷いた。浩貴は何か考えていた。
『中島和也って言ったな。』
『そうだけど？？』
『俺、名前しか知らないんだけど知ってる。いつも学年トップで理事長の息子でボンボン。そんなヤツがバンドなんて無理だね。』
『誘ってみなきゃ分かんないじゃん！！』
『誘わなくても分かってるんだょ！！』
両者一歩も引かず、睨みあっていた。将吾が2人を止めようとしたが遅かった。
『もぅいぃ！！2人に相談した私がバカだった！1人で頑張って入ってもらうから！！！』
そぅ言うと奏は屋上のドアを思いきり閉めて出ていった。将吾はため息をついた。
『何でこうなるかなぁ……』
2人に冷たい風がふきつけた……

第5．5話パート2：中島和也〜2〜

放課後。奏は和也のピアノを聞きに来ていた。
『どうしたの？』
和也はピアノを弾くのをやめ奏に聞いた。
『え……何で分かるの？』
『ピアノを弾いてると何と無く分かるんだ。』
『そっかぁ……実はね、仲間とケンカしちゃって…』
『仲間？』
『バンド仲間なの……すっごく大切な仲間。』
『いいな……仲間がいて。僕には、そんな人どころか友達もいない。』
『じゃぁ入りなょ。ウチのバンドに☆☆キーボードをしてほしい→』
『……僕には無理だょ。』
『大丈夫だょ☆自信を持って♪♪』
『……考えてみる』
『良い返事待ってるね♪♪じゃぁ、帰るね。ばいばぁい☆☆』
奏が音楽室を出ていった後、和也はピアノを弾きながら考えていた。
その顔には笑顔があった。
　その時、音楽室のドアが思いきり開いた。そこにはいかにも悪そうなヤツが5人程いた。和也の顔から笑顔が消えた。
『優等生の和也ちゃん☆☆この頃、学校一の美女、望月さんと仲良しらしいねぇ』
その中でボスらしき人が和也に近付きながら言った。
『望月さんは関係ない。』
『俺達に紹介してくれない？俺達も望月さんと仲良くなりたいんだぁ♪♪ってかお前なんかが望月さんの側をうろつくな！望月さんが汚れるだろ！！！……』
そぅ言うと、ボス意外の人が和也を殴った。和也は倒れた。

その時いきなり音楽室のドアが開いた。
『和也ぁ→→忘れ物しちゃった。』
奏だった。
奏は忘れ物を取ると音楽室を出ようとしたが、変な空気に気付き、足を止めた。
『何してるの？』
さっきのボスらしき人は平然を装いながら、
『別に遊んでただけですょ。そしたら、いきなり和也が転んで。』
っと言った。奏はそれを信じた。『じゃぁ、俺達帰るんで』
『あっ……うん！』
男子達は帰って行った。奏は和也の側に行き、和也を起こした。
『大丈夫？』
『……もぅここにこないでくれ。』
『……どうゆう事？』
『僕に関わらないでくれ。勝手に同情してさぁ、仲間に入ればって言われても迷惑なだけだし！！邪魔だょ！！出ていけょ！！』
奏は言葉が出なかった。そのかわり、涙が溢れた。和也は奏を見ないようにした。
『…ごめんね……邪魔して。さよなら……』
奏は音楽室を飛び出した。
『これで良かったんだ。』
和也は呟いた。しかし、そんな言葉とは裏腹に心は悲しみで一杯だった。……本音を言えば、仲間に入りたかった。今までの人は、僕が出来が良いからと言って、冷たい目で見てきた。だが、奏は違った。奏は僕を対等の人として見てくれて、いつもあの汚れない笑顔をくれた。そしていつの間にか、僕の顔にも笑顔をくれた。だから僕から逃げなきゃ。奏を傷つけたくない……さよなら、奏……
和也の頬を涙が伝った……

第5．5話パート2：中島和也〜3〜

奏は涙を拭きながら廊下を走っていた。すると後ろから奏を呼ぶ声が聞こえ、振り向くと将吾と浩貴がいた。
『どうしたんだ！？何かされたのか！？』
将吾が心配そうに聞いた。
『うぅん。それより何でここに？』
『今から音楽室に行こうと思ってさぁ……中島の事で……』
『えっ……』
『奏がここまで必死になるって事はホントに凄いんだろ？だから1度聞いてみて、仲間に入れるかを考えたくてさ♪♪』
『……もぅ無理だょ……』
『どうゆう事だ？』
『仲間にならないって。私は最初から和也の邪魔してたみたい……』
奏はボロボロと涙を流しながら言った。将吾は奏を抱き締めたかったが、そんな勇気はなく、ただ奏を見ているしか出来なかった。
『ゴメン……俺、ウソついてた。』
突然、浩貴が言った。奏と将吾は意味が分からなかった。
『名前しか知らないって言ったのはウソだったんだ。実は和也とは中学が一緒なんだ。んで何でウソをついたかと言うとアイツは昔からイジメられてて、それに関わりたくなくて、あんなウソついて逃げようとした。でもそれは最低だって気付いたんだ。だから、ちゃんと和也の実力で決めたくて、こうして来たワケ。』
『……でも、もぅ遅いょ……』
『アイツは、人にそんなヒドイ事を言わない。アイツは自分よりも他人の事第一に考えるヤツだ。多分、奏にそんな事を言ったのは、奏の事か何かでイジメられてるヤツに脅されて、奏を助けるためにした事なんだと思う。』

『……私のため??』
『和也はきっと奏を守りたかったんだょ。奏は和也を孤独の闇から救いだした人だからな。』
奏は音楽室へと走りだしていた。言わなきゃ……和也に『もぅ1人じゃないよ』って……
　奏は音楽室のドアを勢いよく開けた。しかし、そこには和也はいなかった。奏は窓から、和也が昨日のヤツらに体育館へと連れていかれてるのを見た。

『んで、望月さんに俺達の事を紹介してくれたか?』
ボスらしき人が和也に言った。
『もぅ望月さんは僕の前には現れない。それにお前らなんかに望月さんを紹介なんてしない!!』
『それが答えか…じゃぁ、死ねや。』
『待って!!』
和也が殴られそうになった時に、奏が叫んだ。
『望月さん!?何でここに!?』
『和也をイジメてるらしいね。』
『……あ~ぁ、バレちゃった。まぁいぃゃ。望月さんに近付く手間が省けたし♪♪』
奏にジリジリと近付いて、もぅ少しで触れようとした時、
『俺達の奏に触るんじゃねぇょ!!』
っと声がした。そこには将吾、浩貴、勇日、蜜柑がいた。
『奏ぇ~先に行くなよ。心配してたんだぞ』
将吾が不満気な声をだした。
『ぉぃ、逃げた方がよくないか?』
1人の男子が言った。
『何でだょ。』
ボスらしき人が睨みながら言った。『あそこにいるの、向井勇日だ。』

『向井勇日？』
『前に、最強最悪と言われた男だ！！覚えてないのか？？？』
それを聞くと和也をイジメてたヤツらの顔は青くなった。そして逃げ出した。

『和也！！大丈夫？？』
奏はすぐに和也のもとへと行った。（それを見て悲しむヤツ1人）
『何で？？僕は望月さんを傷つけたのに……』
『和也が私をかばうためについたウソって分かったからいぃの☆☆
それに、私達は仲間でしょ？？』
『えっ……でもあれは断ったハズ……』
『ホントは入りたいんでしょ？』
『……ぅん……でも、僕にはそんな資格ないょ……』
『なぁに言ってんだ。』
将吾が言った。
『資格は俺達が決めるんだ。今までは奏が1人で入れたいって言って暴走してたヤツであって、俺達はまだ、何も『入ってくれ』なんて言ってないハズだ。だから、今までのは無し！！和也がホントに入りたかったら、俺達に実力を見せろよ。』
っと言い将吾は意味ありげに笑った。
『音楽室に行こうか☆☆☆』
奏が明るく言った。皆は音楽室へと歩きだした。
『望月さん！！』
和也は奏を呼び止めた。
『あの、あり……』
和也がお礼を言おうとした時、奏の指が和也の唇を押さえた。
『そんな言葉はいらないから、そのかわりに、私の事を奏って呼んで♪♪』
そぅゆうと和也の唇から指を放した。和也は笑顔で頷いた。
『分かった……奏！！』

和也は、奏と並んで歩きだした。和也の顔には寂しいという表情はなかった☆☆……

第5．5話パート2：中島和也〜3〜（後書き）

やっと次から本文へと移ります（p圍q0∀0＊）Ｖｖ★＊ ゜＋

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4755a/

レインボー

2011年1月12日15時04分発行